

近代日本の教育とキリスト教 (2)

幕末・明治初期における宣教師の渡来と教育活動

平沢 信康*

Christianity in Modern Japanese Education (2)

The Coming of Missionaries and Their Educational Activities in the late Tokugawa Era and the Early Years of the Meiji Era in Japan

Nobuyasu HIRASAWA*

Abstract

In the middle of the nineteenth century the arrival of Western ships shocked the Japan of the Tokugawa era. They demanded that Japan should 'open the country' to provide fuel (coal), food and water for steamboats. In 1858 the Tokugawa Shogunate concluded a treaty with the U. S. A. and then concluded similar treaties with other strong Western countries in succession.

As a result of these treaties, several ports were opened to foreign countries and trade began. At the same time, missionaries were sent by Christian sects, mainly from America.

The shogunate carried out a policy that prohibited Christian belief. The new Meiji government followed this policy and continued to suppress Christians.

Regarded as secret agents, missionaries were put under strict observation at the end of the Edo period. Under these circumstances they learnt the Japanese language, and tried to translate the Bible into Japanese.

Some of them were engaged in medical welfare. Others were invited to schools in various places in Japan. They taught adolescents English or science. The missionaries found that young intellectuals in Japan had a strong thirst for knowledge.

This paper describes the coming of the missionaries, their careers, and educational activities, the introduction of Christianity into Japan, and the political situation in those days.

KEY WORDS : *Modern Japanese Education, Christianity, Educational Cultural Exchange*

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

はじめに

教育史研究を豊かにしていくためには、宗教史・政治史・社会史・思想史・文化史などの成果を存分に吸収し、活用しなければならない。とくに日本の近代史においては、東西文化の接触史としての観点を除外することは不可能であり、なかでも注目すべきものの一つはキリスト教の流入・受容史である。これを省いては西洋文明・文化の東漸を語り得ない。幕末・維新前後、さらに明治期におけるキリスト教徒の活動とその展開たる教育文化の歴史は興味わく時期であり分野であるといえよう。

前稿「序説」において、中世末期から近世にかけての概観と本テーマに寄せる問題意識を綴った。それにつづく第1章は、幕末・明治初期、すなわち「開国」から明治維新をはさんで切支丹禁制の高札撤廃までの間におけるキリスト教にかかわる教育活動を考察することとしたい。これは藤代泰三による日本プロテスタント教会の歴史における最初の時期区分、すなわち1859（安政6）年から1873（明治6）年までの「宣教準備の時期」¹⁾と重なる期間である。

この時期は、宣教師らが初めて公に日本にのりこみ、キリスト教禁制下、ひそかに伝道の準備を開始していた時代である。キリシタン禁教政策のために公には宣教できなかったが、宣教師の日本語研究、聖書の邦訳、また密やかに入信・授洗がおこなわれ将来の教会指導者の養成がなされたほか、キリスト教の立場に立った教育の営みも生まれた。宣教師たちは渡来後、各藩や県の学校へ赴任し、また私塾や学校を創設し、なかには新政府へ献策をなす者もあった。いわば「潜伏」の時期であるこの時代に、その後発展することになる、いくつかの家塾が創られ学校の萌芽が誕生していった。この章では、彼らの教育活動のほか、若き士族を中心とする知識青年らキリスト教受容者の意識、禁教政策の解除までを叙述する計画である。

紙数制限のため、本稿ではその半ばにあたる第1節「宣教師の渡来」と第2節「各地の教育機関

への招聘と新政府への貢献」を扱うにとどめねばならなかった。

本文に登場する人物の経歴に関しては、主として『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、1986年）と『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）を参照した。時間的地理的制約のため、今回は、オリジナルな資料を博搜駆使しての分析には手が届かず、おおむね先行研究に学びつつ、それらを再構成し、本テーマに関する鳥瞰図を画くにとどまった。

第1節 宣教師の渡来

すでに16、7世紀以来、ヨーロッパ人はインドからマレー半島を経て、今日のインドネシアまで進出し、スペインはフィリピンを手に入れていた。産業革命に成功すると西欧先進諸国は、そこで生産された商品の消費市場の拡大と植民地を求めてアジア進出を強化した。18世紀末には蒸気機関ができ、1830-40年頃に船にとりつけられて実用化されると、大洋での航海はいっそう容易になった。

19世紀前半には、アヘン戦争を契機に、ヨーロッパ列強は急速に中国へ勢力を扶植していった。清朝は不平等条約を結ばされ、またアヘン戦争や太平天国の乱などによりその権力基盤を揺るがされ、やがて半植民地化されていった。

アメリカは東部からしだいにフロンティアを拡大しながら西部開拓を進め、ついに1850年ころには太平洋岸に到達した。1846-48年のアメリカ=メキシコ戦争に勝利した米国は、カリフォルニアとニューメキシコの領有を果たし、これにより太平洋と大西洋の両洋にわたる大陸国家となった。

一方、ロシアは、19世紀半ば、シベリアを経由して極東に勢力を伸長し、さらに、南進の動きを見せていた。1852年にはロシア船が下田に来航した。

こうして1850年代に、国際的なパワー・ポリティクスにおけるいわば東漸・西漸・南進の3つのベクトルが日本でぶつかる事態を迎えるのである。それは同時にキリスト教伝来の道でもあった。

1795年ロンドン宣教会（LMS）が、1810年にはアメリカ伝道教会が創立された。2年後、東洋

伝道のため5人のアメリカ人宣教師が出発した。1828年にはボストンで日本伝道のため献金が捧げられた。37年5月シンガポールで最初の日本語訳聖書「約翰福音書之伝」が発行された。43年にはイギリス琉球伝道会が創立され、46年5月ベッテルハイム夫妻が那覇に上陸して布教活動を開始し、同年8月、福音同盟会がロンドンで結成された。ベッテルハイムは54年に沖縄を去り、琉球語訳の新約聖書を刊行した。

一方、カトリック側は「再布教」の機会をうかがっていた。パリ外国宣教会は、17世紀末東南アジアの布教の責任を担うようになり、日本教会の復活を早くから望んでいた。マカオのイエズス会東洋支部のリボア N. F. Libois は、フォルカード T. A. Forcade と中国人神学生オーギュスタン高を選抜し、日本語を学ばせ将来に備えるため1844（天保15）年4月那覇に送った。彼らは琉球官吏の種々の拒絶にもかかわらず、ついに上陸に成功し、泊村天久聖現寺に軟禁されながら、機会を待った。グレゴリウス16世は1846年3月、フォルカードを初代日本教区長に任命、5月、日本に再び代牧区を設ける教皇令を発した。

少しさかのぼるが、1837年、アメリカ船モリソン号に対する砲撃事件が起こった。広東のアメリカ商人が漂流民を送還して通商を求めたのに対し、幕府は外国船打払令により浦賀で砲撃、さらに薩摩藩も砲撃を加えたので、むなしくマカオに帰った。しかしその後、各国の対日通商要求は強まるばかりであった。また蒸気船は多量の石炭を燃料として消費したため、日本は燃料と飲料水の補給基地として期待された。18世紀の70年代におけるロシア船の北海道への来航にはじまる諸外国の日本への断続的な「開国」への外圧はやがて頂点に達する。

1853（嘉永6）年5月、アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー Mathew C. Perry 提督が軍艦4隻を率い、那覇について浦賀に入港し、その報が江戸にもたらされるや、市中は上下を挙げて異常な衝撃を受けた。ペリーはサスケハンナ号で主日礼拝を行ったが、この艦隊はのちに触れるゴープルと仙太郎が乗船していた。

武力を背景とする交渉の末、翌年、日米和親条約の締結を余儀なくされた幕府は1639年以降続いた鎖国を解いて開国し、下田と函館の開港、漂流民の保護、アメリカ領事の日本駐在などを認めたほか燃料・食料を供給することとなった。幕府は引き続いて同様の条約を、イギリス・ロシア・オランダと締結した。

さらにアメリカ駐日総領事 T. ハリス Townsend Harris が1856年8月下田に来航し着任、1858（安政5）年7月、日米修好通商条約が締結され、これによって神奈川・長崎・函館が開港された。この条約は、全14カ条と貿易章程7則からなっているが、そのうちの第8条により、居留地における在日アメリカ人の居留地内の信教の自由と礼拝所の建立が認められた。また、踏絵廃止が明記された。幕府はその後オランダ・ロシア・イギリス・フランスとあいついで修好通商条約を締結した。

フォルカードのあと那覇では2人のカトリック宣教師が交代し、さらに1855年にはパリ外国宣教会のジラル、メルメ・ド・カション、フューレが加わり、日本語を学びつつ開国を待っていた。58年10月、日仏修好通商条約が調印され、ジラルが日本教区長代理に任命された。翌年9月実施にともない、ジラルは日本知牧に任ぜられフランス総領事館付き司祭兼通訳の資格で江戸に入り、またメルメは函館に赴いた²⁾。60年、ムニクウが来日した。

フランスとスイスとの国境のジュラ山中レ・ブーシューに生まれ、1852年パリ外国宣教会に入り54年に司祭に除せられたメルメ・ド・カション Cachon, Mermet de 1828.9.10-1871頃は、中国で布教に従事した後、55年香港から沖縄に来航、那覇に上陸して日本語を学んだ。58年日仏通商条約締結の際、全権公使グロ (Jean Baptiste Luis Gros, 1793-1870) の通訳として来日し、59年横浜開港とともに再び来航しフランス領事ベルクール (P. du Chesne de Bellecourt) の通訳として活躍した。のち函館に赴任し布教のかたわらフランス語を教え、66年帰国した³⁾。

1862年1月、パリ外国宣教会のジラルにより横浜居留地80番に最初の天主堂が建立され、一方、

長崎に派遣されたフェーレ、プティジャンにより大浦に天主堂が建立され、65年2月祝別式を挙げた。まもなくキリシタンの復活・発見がみられ、その後いわゆる浦上四番崩れが起こり信徒が流罪となったことは周知の通りである⁴⁾。

カトリック教会の場合、フランスと強く結びついていたことはその後の政治情勢に左右されることとなった。64年、幕府にロッシュ公使が赴任して幕府への援助を強めたが、維新後になるや明治政府に対するフランスの立場を弱いものにした。こうした特定国家に依存する傾向はカトリック教会にとって、後の展開において社会的にも文化的にも広がりやをせまいものにした。

ハリストス正教会は、ロシアの修道僧ニコライ（イバーン・カサートキン）によってもたらされた。彼は1861年6月に函館の領事館付きの司祭として来日し、ひそかに伝道の機会を待ちながら7年間日本語と東洋文化研究に没頭した。68年、3人の改宗者に洗礼を授け、この年ロシアに帰国して日本伝道会社の必要性を説き、70年その首長に任ぜられて帰任、盛んに伝道を展開することとなる。

日米修好通商条約締結後まもなく、中国のアメリカ公使館書記官 S. W. ウィリアムズ、上海で伝道していたアメリカ監督教会宣教師 E. W. サイル、およびアメリカ巡洋艦ポーハタン号付牧師 H. ウッドは、連名で、長崎からアメリカの各ミッション本部に日本宣教を要請した。彼らは日本伝道のため宣教師を派遣するよう文書をもって各自が所属する伝道会本部に訴えることにより、日本伝道の端緒を開いた。その結果、翌年にはプロテスタント宣教師6名があいついで日本に赴任することになる。こうして、日本へのキリスト教の伝来は、欧米資本主義列強との国交とともに始まったのである。

井伊大老の開国政策に反対する尊皇攘夷が激しく主張され、安政の大獄にひきつづいて桜田門外の変が起こり、幕府は急速に権威を失墜していく。「東洋道徳・西洋芸術」ないしは「和魂洋才」が提唱され、活発に論じられたこの時期、開化派の活動によって、社会の全面的変革を意図する開化

思想が着実に成長していた。諸外国と修好条約が締結されたことは、ますます開化意識を高揚させる契機となり、また、幕府や雄藩の権力内部への開化勢力の進出をいっそう促進させるものとなった。

先鋭化した国内情勢のなかで、ドラスティックな政治的変革が企図されていた幕末期日本への伝道準備を開始したのは、日本と国交を開いた諸外国中アメリカの占める比重を反映して、ほとんどはアメリカ系諸教派に属する宣教師たちであった。彼らの中心となったのは、以前、中国やその他東洋各地で伝道に従事していた経験者であり、また、彼らの所属教派教会外国伝道局は、いずれも中国在住宣教師を通じて日本の情報を入手し、伝道の手がかりをとらえるのに腐心していた⁵⁾。

ウィリアムズ、ブラウン、ヘボン、マクレーらは中国で、ブラウンはインドのアッサムやミャンマーで壮年期を過ごし、中国やアジアの文化に接した後に来日し、その経験を日本の土壌で活かした。1859-60年に日本へ最初に渡来した宣教師のうち、リギンス、ウィリアムズ、ヘボン、ブラウン、ネヴィウスら5人はすでに中国で宣教師または教師としての経験があり中国事情に通じていた。中国新教史は日本のそれよりも53年早いモリソン Robert Morrison, 1782.1.5-1834.8.1の渡中（1807年）から始まっていた。彼は長年中国伝道に従事し、いくら努力しても1人の信者さえ得られなかったが、日本では宣教師の入国後10年もたたないうちに信者ができ、15年すると教会が成立するのであった⁶⁾。

開港場中、文化史的役割において重要なのは長崎と神奈川（横浜）である。日米修好通商条約によって、1859年の5月には宣教師 J. リギンスが、6月には C. M. ウィリアムズが長崎に派遣された。つづいて10月には J. C. ヘボン、11月には S. R. ブラウンと D. B. シモンズが神奈川に、フルベッキが長崎に到着した。翌60（万延元）年に J. ゴーブルが、61年11月に J. H. バラが神奈川に着き、63（文久3）年5月にはタムソンが横浜に渡来し、異教の地に足跡を刻していった。

来日したこれらの宣教師たちはいずれもアメリカ

カの宣教師で、次の3教派に属していた。リギンズとウィリアムズは米国監督教会（Protestant Episcopal Church of U. S. A.）、フルベッキ、ブラウン、シモンズは米国〔和蘭〕改革派教会（Reformed Church in America）、ヘボンとタムソンは米国長老教会（Presbyterian Church in U. S. A.）からの派遣であった。

アメリカ・オランダ改革派教会 Reformed (Dutch) Church in America はカルバン主義に基いてオランダに生まれたプロテスタント教団を母体とし、そのなかからアメリカに移住した人々が設立したものである。徳川幕府とオランダとの関係のかねてからの特殊性は、開国に際して、いち早くこの教団の伝道心を刺激したとみえ、同派からフルベッキ、ブラウン、シモンズ、バラ、キダーらの宣教師を渡来せしめたのである。維新当初わが国へ最も有能な宣教師を派遣したミッションはこの教派である⁷⁾。

フルベッキ Guido H. Fridolin Verbeck 1830-98はオランダのツァイストに生まれ、モラヴィア教会で受洗、同派の学校に学び、学友をとおして蘭・英・独・仏語を自由に話せるようになった。その後ユトレヒト工業学校を卒業、志を立て1852年渡米、土木技師としてウィスコンシンやアーカンソーで架橋工事に従事した。ところがコレラにかかり、九死に一生を得て献身を決意し、ニューヨーク州オーバン神学校に学んだ。神学を研鑽して日本伝道を決意し、57年、ウィリアムズ、S. W. らによる日本宣教の呼びかけに応じたアメリカ・オランダ改革派教会により、最適任者として選ばれ接手礼を受ける。59（安政6）年4月、マリアと結婚、翌月ブラウン、S. R.、医師シモンズ、C. M. らと共に日本に派遣され、同年11月7日長崎に上陸した。フルベッキは、蘭学を通して西欧文化に接していた当時の日本の事情を考慮して長崎を選んだという。崇福寺内の広福庵に住み、聖公会のウィリアムズ、C. M. と同居し、親交を結んだ。

ブラウン Brown, Samuel Robbins 1810.6.16-80.6.20は、コネチカット州イーストウィンザーにテモシーとフィベ・ヒンスデールの子として生

まれ、賛美歌307・319番の作者として知られる母から、外国への伝道者になることを期待された。1932年イエール大学を卒業後、南部に赴き、のちユニオン神学校に学び、ニューヨーク市の長老教会に属した。選ばれて中国モリソン学校長となり、39年マカオ、のち香港に移り、8年間中国青年のキリスト教化に尽くした。47年妻が病み帰国、51-59年ニューヨーク州オーバン近郊オワスコ・アウトレットの改革派教会牧師となる。59（安政6）年、50歳近くになって、フルベッキ、G. H. F.、シモンズ、D. B. と共に来日。同年11月1日より神奈川の成仏寺に居住し、ヘボン、J. C. と協力して日本語研究、伝道、聖書翻訳に従事した。

ジェームズ・ハミルトン・バラ James Hamilton Ballagh 1832.9.7-1920.1.20はニューヨーク州デラウェア・カウンティのホバートの農家に生まれた。両親ともにアメリカ改革派教会の熱心な会員だったが、父親が仕事に失敗し、バラが12歳の時ニューヨークに移転、さらにロックランドに移転している。バラはその間、雑貨店や商館で働いたが、1852年ラトガース大学に入学、さらにニューブラウンズウィック神学校に学び、アメリカ改革派教会のニュージャージー州バーゲン中で説教免許を得、教師に任職している。神学校在学中、日本への宣教を求める呼びかけがあり、日本伝道を考えるが、S. R. ブラウンが来校し日本伝道への関心を引き起こしたことにより決意を固めた。60年に神学校を卒業し、1861年5月、マーガレットと結婚、翌月、喜望峰経由の船で日本に向かって旅立ち、この年のうちに到着した。

日本聖公会最初の主教となるウィリアムズ Williams, Channing Moore 1829.7.18-1910.12.2はヴァージニア州リッチモンドで生まれ、ウィリアム・アンド・メアリ大学、ヴァージニア神学校を卒業し、1855年アメリカ聖公会内外宣教会派遣の宣教師となり中国へ赴く。59年7月日本最初のプロテスタント宣教師のひとりに任命され長崎に上陸、禁教下、宣教開始に備え日本語の習得に専念した。65年中国と江戸の伝道主教に推薦され帰国。リギンズは在日約1年にして病気のために帰国したが、ウィリアムズは37年間日本に滞在、の

ち中国と江戸（日本）の広大な地域にわたる伝道事業を統轄し、立教学院の前身を創立する。

ヘボン式ローマ字で有名な長老教会宣教師ヘボン（ヘップバーン）James Curtis Hepburn, 1815.3.13-1911.9.21は、ペンシルヴァニア州ミルトン生まれのアメリカ人で、一時父の希望で法律家を志したが、自然科学の興味から医師となった。プリンストン大学に学び、ついでペンシルヴァニア大学医学部に入り、脳卒中の研究で1836年 M. D. の学位を受け、プリンストン大学から M. A. を得た。この間34年にミルトンのアメリカ長老教会に入会。40年リート、C. M. と結婚、翌41年宣教医として中国へ派遣された。シンガポールに滞在中、ギュツラフ、K. F. A. 訳『約翰福音之伝』を得、アメリカ長老ミッション本部に送る。また香港のモリソン記念学校のブラウン、S. R. と出会った。43年からアモイで医療伝道に従事したが、そこで息子を失い妻も病み、自らの健康も衰えたのでやむなく45年帰国。翌年ニューヨーク市に開業し、その人格と手腕は市内屈指との名声を得、名医として知られた。しかし不幸がつづき、3人の愛児のあいつぐ病没は平穏な生活の再吟味を強い、そのなかで日本開港の報を知り、伝道を決意しての来日であった。後に彼は明治学院初代総理となる。

ヘボンは「君子」とも表された人物でインテリであったが、犯罪をおかしたのちに改心した経歴の宣教師も来日している。米国浸礼自由伝道会社（バプテスト派）から派遣されたジョナサン・ゴープル Goble, Jonathan 1827.3.4-96.5.1である。彼はニューヨーク州ウェイン村に生まれ、父が11歳の時に死亡し、数年後、母が再婚したため農場経営の祖父母に養育された。19歳のときに金銭強要の脅迫状（労賃の争いのもつれか）を送ったかどで同州オーバン刑務所に2年服役、その間に回心を体験、東洋伝道を志す。製靴技術を身につけて出所し、1848年6月受洗。51年12月ペリー艦隊乗員募集に応じて日本遠征に参加し、ミシシッピ号乗員として琉球・浦賀・横浜・下田・函館に上陸、琉球でベッテルハイム、B. J. の影響を受け、日本伝道の志を固めた。栄力丸漂流民の仙

太郎を伴い帰国、55年10月ハミルトン市マディソン大学付属中学（アカデミー）に共に入学、終了後1年間神学部科学課程に学ぶ。その後、自由伝道協会（ABFM）という北部バプテストの小会派に執拗に日本教区を開設し、自分を宣教師として派遣するよう申し入れた。59年バプテスト教会の宣教師となり11月接手札を受け、翌1860年4月1日（安政7.3.11）、ヘボンやブラウンに半年遅れて横浜に渡来した。その後いったん帰国したが、明治6年に再来日し、聖書販売者として各地を巡回した。

ヘボン夫妻、ブラウン一家、ゴープル夫妻、ジェームズ・バラ夫妻ら来日したアメリカ宣教師の多くはまず、京都知恩院を総本山とし芝増上寺を大本山とする浄土宗の正覚山法雨院成仏寺に住んだ。永仁年間（1293-1299）に法燈国師によって開基されたと伝えられるこの神奈川の寺に各派の宣教師たちが同居していたのである。1861年の晩秋にバラが来日したとき、長老派のヘボンは成仏寺の本堂に1人で住み、ブラウン一家は本堂の隣の坊さんの住まい（庫裏）に、バプテスト派のゴープルは境内の小家屋に住んでいた⁸⁾。62年来日した宣教師ジョン・トマス・ギュリックもこの寺にブラウンと居住した。

日米修好通商条約では神奈川が開港場と指定されていたが、実際には幕府は入り江の向こうの人家100戸たらずの半農半漁の一寒村であった「横浜村」をこれに当てた。東海道の重要な宿駅の一つ神奈川で、貿易・外交その他で来日した外国人が参勤交代などの大名行列や攘夷派の浪人たちと接触して不慮の事件を起こさないための配慮であった。ところが神奈川には条約に従って外国人が入り込んできたため、ハリスの反対にもかかわらず、幕府は横浜を神奈川の一部として急いで開港場の体裁を整えて押し切り、神奈川にいた外国人を横浜の居留地に移した。尊皇攘夷の動きが激しくなったためである。

南北戦争の影響のため、1864年から1868年までの数年間、アメリカからは宣教師の来日をみなかった。これには明治維新による日本国内における内乱の影響もあろう。

1869年になると、再びアメリカ・オランダ改革派教会から宣教師の派遣が再開されるようになる。その一人、スタウト Henry Stout 1838.1.16－1912はニュージャージー州サマセット郡ラリタンに生まれ、65年ラトガース大学、さらに68年ニューブランズウィック神学校を卒業、68年5月按手札を受け、翌年3月長崎に渡来した神学博士である。

アメリカ・オランダ改革派教会の婦人宣教師であるキダー Kidder, Mary Eddy 1834.1.31－1910.6.25は、ヴァーモント州ウォーズボロのクリスチャンの家庭に生まれ、タウンシェンド・アカデミー在学中に受洗。さらにサクソン・リヴァー・アカデミー、モンソン・アカデミーに学び、ニューヨーク州スプリングサイドのブラウン, S. R. が開設した男子校教師を2年務めた。ブラウンの牧する教会の会員であり、早くから外国伝道の志を持ちハイスクールの教師をしながら機会を待っていた彼女は、「女子教育は日本がキリスト教国になる前にやらなければならない」とブラウンの勧めにより、1869年（明治2年）8月ブラウン一家と共に来日し、1年間新潟に住んだ。

南北戦争（1861－65）後、婦人伝道局が続々と設立されると独身婦人宣教師はさらに積極的にリクルートされ、支援されるようになった⁹⁾。日本に派遣された最初の独身婦人宣教師メアリ・E・キダーについては、小倉山『アメリカ婦人宣教師』第3章3節に詳しい。同書には、その他の幾人かの婦人宣教師についても伝記的事実が記載されている。アメリカ婦人一致外国伝道教会（異教国への伝道と女子教育を目的とする超教派の団体）からは1871年、クロスビー、ピアソン、ブラインが派遣された。

長老教会からは、維新後、コロンス夫妻が、また67年シカゴ大学を卒業したオハイオ州生まれのクリストファー・カロザース（カラーザーズ、カロゾルス）Christopher Carrothers 1840.5－?が69年7月に妻とともに送り込まれた。

遅れていた会衆派については、アメリカン・ボードから1869年11月にダニエル・クロスビー・グリーン Daniel Crosby Greene 1843.2.11－

1913.9.15が派遣された。マサチューセッツ州ロクスベリー生まれの彼は、ダートマス大学をへてシカゴ神学校、アンドーヴァー神学校を卒業、アメリカン・ボード最初の宣教師として妻とともに来日、70年3月、同派が伝道の拠点と定めた神戸に移った。彼はのちに同志社で教鞭をとり、聖書邦訳に尽力した。その後、同派から71年にギュリック, O. H., デイヴィス、翌年ベリーとゴードンが派遣された。

また69年1月には、イギリス教会宣教会最初の日本派遣宣教師であるエンソル（漢名一空）が来日した。

幕末維新期の日本にはなお、キリスト教の流入を夷狄の「間接侵略」の手段と考え、交易にまぎれて潜入する「邪教」であるとみなす者が少なかつた。かつてのキリシタン弾圧時代とほとんど同じ論拠で「排耶蘇」や「護教」が繰り返された。しかし、安政の通商条約締結後も「邪教」は引き続き厳禁であったにもかかわらず、キリスト教関係書籍は多数持ち込まれていた¹⁰⁾。

幕末日本に対する開国要請が喧しくなってくると、これに反発して攘夷論が台頭し、それと絡んでキリスト教邪教観が激化してくる。幕末後期水戸学にみられる攘夷思想につながるキリスト教邪教論はその顕著な例である。代表的な反キリスト教のイデオログとしては、水戸藩士・会澤正志斎（1782－1863.8.27）があげられよう。彼は、10歳で藤田幽谷の門に入り儒・史学を学び、1799年彰考館に入り『大日本史』の編集に従事、彰考館総裁・水戸藩校弘道館の総教などをつとめ、後期水戸学の理論的指導者の役割を果たし、また徳川斉昭を助けて藩政改革にあたった。水戸学の経典として広く普及した主著『新論』（1825）では、大義名分論にもとづきキリスト教を夷教として斥け、その博愛思想を墨子の兼愛説と同一視して批判していた。

明治維新によって徳川幕府にとって代わった明治新政府は、「知識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振作スヘシ」（「五箇条誓文」第五条）という基本方針にもとづき、上から「文明開化」政策を積極的に推進し、欧米諸外国からの制度文物の導入を勧

奨したが、キリスト教にたいする基本姿勢は幕藩時代の政策を踏襲した。

当時、次々とキリスト教宣教師が日本に入国していたとはいえ、日本政府は依然としてキリスト教が外国からの侵略や内乱の要因になり得るとし、その布教活動に強い猜疑心をいだき、欧米列強の干渉を排除しようとしていた。明治政府はキリスト教宣教師に諜者（スパイ）を放ち、諜者が宣教師に接近して信者になりすまし、逐一内部の動向を報告していた。明治政府は、弾正台から派遣されたスパイに布教に対する外国の態度を報告させていたのである。

なかでも安藤劉太郎？—1880（明治13）は、日本基督公会に潜入した太政官上等諜者（スパイ）である。愛知県出身の彼は、本願寺派の僧侶で僧名は猶龍、破邪僧として働き横浜担当の耶蘇教諜者として活動した。明治5年正月から同年9月までの諜者報告書が現存する。1870年横浜に移り72年3月 J. H. バラから受洗し、日本基督公会の創立者の一人となった¹¹⁾。

伊澤道一は、大阪神戸方面のキリスト教探索に従事した太政官下等諜者（スパイ）で、聖公会の宣教師 C. M. ウィリアムズに密着して諜報活動を行った。1871年11月、ウィリアムズから祈禱文の翻訳を命じられ、「早禱の懺悔」などを訳出。『浪華日記』など諜者報告書には、組合教会の D. C. グリーン、J. D. デイヴィスなどの活動報告もある¹²⁾。

鵜飼徹定1814—1891.3.15は浄土宗管長で、瑞蓮社順誉と称し、松翁・古溪・古経堂と号し、知恩院第75代住職である。筑後国御伊郡久留米に生まれた彼は、1861年より72年まで武蔵国埼玉郡岩槻町浄国寺の住職をつとめ、幕末からキリスト教排撃に奔走した。68（慶応4）年『南蛮寺興廃記』、『破堤字子』などの、いわゆる〈破邪書〉を復刻。68（明治1）年『釈教正謬初破』を著して、J. エドキンズの大乗非仏説に反論を加えた。69年『笑邪論』においては、神の創造を批判し、全知全能を非難し、キリスト教は忠孝を軽んじ、わが徳風に合致しないと論じた。68年京都で開かれた諸宗同徳会盟に参加し、晩年、自ら中心となって東京

に会盟を組織し、護法破耶に尽力した¹³⁾。

このような空気のなかで、宣教師たちは上陸はできたものの、スパイであるかのように当局からいつも睨まれながら生活しなければならなかった。ウィリアムズ、サイル、ウッドは、長崎奉行と会見したときに、日本は外国と貿易を始めたので何でも受け入れるが、アヘンとキリスト教の輸入は例外であると、奉行から釘を刺されている¹⁴⁾。

比較的自由があった長崎とは異なり、神奈川では、宣教師は絶えず浪士の狙うところとなっていた。ヘボン夫人は成仏寺の門前で暴漢に棒で打たれ身体を悪くし、大学生の息子の様子を見ることをかねて帰国した。維新前後の時代における排外的空気、とくに神奈川の情勢は、例えば1862年の生麦事件の例にもうかがえるように、きわめて陰悪なものであった。

バラ夫人は「ローニン（浪人）たちが肩で風を切りながらのし歩き、『神国』を汚すふとどきな外国人がいたら容赦しないという時代でしたから、私たちはいつも命の危険を感じながら暮らしていたのです」と回想している¹⁵⁾。彼女は「日出づるの国」の民の印象について、中国でみたような無知、悲惨、貧困、非衛生などは見かけないものの、「そのかわり根強くはびこっている傲慢、頑迷、欺瞞などのことを考えますと、この先何年かかっても太刀打ちできる相手ではないように思えて、むやみに悲しく残念でなりません」¹⁶⁾と吐露している。

彼らは排外思想や敵対意識に直面しなければならなかった。宣教師の周辺にはきびしい監視の目が光っており、寺の境内の3つの小屋に数人の役人が詰めていて、彼らの行動をもらさず書き留めては報告しているようであった¹⁷⁾。

ヘボンは1861年春、神奈川の宗興寺（曹洞宗）で施療院を開き、多くの患者を治療して感謝されたが、約5カ月後中止を命じられた。生麦事件に際し、彼は負傷者の手当を本覚寺境内で行っている。一時離日していたシモンズは翌年、横浜居留地28番で居留民の医師として開業し、好評を博した。ブラウンは63（文久3）年横浜居留地に移り、居留民のための教会を設けて礼拝を行った。また

同年『日英会話編』（Colloquial Japanese）を上海で出版した。ヘボン、ほとんど幽居の生活をおくるなかで、もっぱら日本語の研究と英和辞典の編集に努めた（その成果は67年に『和英語林集成』『真理易知』の刊行〔上海で印刷〕として結実する）。

維新後も日本の国内に掲げられていた「切支丹邪宗門ノ儀ハ堅ク禁制タルベキ事」というキリスト教禁制の高札のため、宣教師たちは直ちに布教・伝道活動に入ることはできなかった。63年には神奈川奉行が横浜天主堂を襲い日本人55名を捕えた。政府の厳重な監視のもとにおかれた宣教師らはまず日本語の習得に励み、それを通じて聖書や賛美歌の翻訳の作業を進めながら、あるいは医療に従事し、あるいは家塾を設立し、また招かれて英語を教授した。こうした慎重なアプローチによって日本人の目をしだいにキリスト教へ開いていこうとする姿勢をとらざるをえなかった。

第2節 各地の教育機関への招聘と新政府への貢献

1863年には横浜に聖公会の会堂（のちの横浜クライスト・チャーチ）が建設され、また在留アメリカ人による横浜ユニオン・チャーチが創設された。71年にはバラが居留地167番に小会堂を建てた。しかしキリスト教が危険思想視されていることを悟る宣教師たちは直接伝道をなしえず間接的な教化活動に甘んずることを余儀なくされていた。そこで彼らは教師と医師の資格で日本の社会に影響を与えようとして、英語教育に必要な書籍を準備し、あるいは各種薬品と医療器具を持参して西洋文明の優秀さを伝え、彼らの名声は学校と病院を通じて徐々に浸透していった。

神奈川のヘボンは1862年、大村益次郎ら幕府からの委託学生9名に英語を教え、長崎のフルベッキは幕府直轄の外国語学校「済美館」の英語教師のポストを提供された。彼は64（元治1）年、校長に就任して1日2時間、1週5日教授に当たった。この学校は1858年に幕府が長崎に設立した英語伝習所を、63年に洋学所、さらに65年済美館と改称したもので、語学のほか洋算も教授した。済

美館はその後68年に広運館と改称、本学〔国学〕・漢学・洋学の3局を設置し、71年に文部省所管となる。アメリカのオランダ改革派教会派遣の宣教師ヘンリ・スタウトが69年に来日し、フルベッキの後を受けて広運館で英語を教えた。

フルベッキはまた、66（慶応2）年長崎に設けられた佐賀藩の致遠館の教師となり、副島種臣・大隈重信ら多くの俊秀を教導育成、新約聖書と米国憲法の2英書を講義し、大隈に大きな影響を与えた。大隈は、元来工科的な採鉱や分析をやった経験もある人物で、幸い良い工科の外人教師が見つかったと思い、フルベッキのもとへ行ったが、聖書ばかり教えるので、何かほかに教えてくれるよう希望したところ、ジェファソンの草案した独立宣言とアメリカの憲法を教えられた¹⁸⁾。

1862年10月、江戸幕府は横浜に留官吏の子弟を教育する目的で運上所前の官舎で横浜英学所（Yokohama Academy）を開校した。一説には64年、運上所の一室に設けられたともいう。66年2月、神奈川奉行支配定役の官舎に移転したところ、同年10月20日の大火で類焼し廃校となった。まもなく再興したが、68年に再び廃校となった。この学校でヘボン、ブラウン、バラ、タムソンら宣教師が日本人学生に英語を教授した。大鳥圭介、矢田部良吉、星亨など明治期の政治・文化に貢献した人物がここで学んだ¹⁹⁾。

ブラウンは67（慶応3）年に自宅が火災に遭い一時帰国したが、69（明治2）年にミス・キダーを伴って再度来日し、新潟英学校（北越学館）の教師として彼女とともに赴任した。そこを1年足らずで辞任し、翌年9月、県の学校・横浜修文館の英語教師に招かれた。この学校は66年1月、伊勢崎山下（野毛林寺下）の神奈川奉行所役宅で漢学を教授する文学所として開設され、一時廃止になったが、時代の趨勢で英学を希望する者が急増して英学校の色彩が強まり、70年5月に旧修文館を英語専門として再開、ブラウンの卓越した英語教育で全国に名を馳せた。ここで3年の契約任期をつとめ、佐藤昌介、井深梶之助、宮部金吾、真木重遠、駒井重格、小野梓らに感化を与えた²⁰⁾。

医学方面でも教師として招かれたものがある。

ヘボンにつぐプロテスタント米人宣教医の第2号であるシモンズは、一時帰米の後、ヨーロッパへ赴きドイツやフランスで医学の研鑽を積んだらしいが、再び来日し、1870年3月、一時大学東校（東京大学医学部の前身）の教師となった。のちヘボン宅で眼科手術の手伝いをし、また福沢諭吉の発疹チフスを治療しているが、71年横浜病院（横浜市立大学病院の前身）に医学教師として週1回出張している²¹⁾。

さらに明治新政府のなかには、政治・教学の顧問として宣教師に助言を求める動きが現れた。

長崎で大隈重信や松方正義、西郷吉之助、大久保利通らに英語を教えた縁で、フルベッキは新政府の若きリーダーたちと相識の関係にあったのみならず、その識見を高く買われていた。フルベッキは69（明治2）年、太政大臣三条実美の囑を受けて上京、開成学校教授となってその開設（同年）を助け、のち大学南校教頭となり教育政策の遂行に力を尽くすとともに、法律制定等に関し政府の諮問に応じ献策し、政府顧問としてはたらいだ。当時の御雇外国人教師としては最高の俸給600円（月給）や明治天皇からの勅語の下賜は、その重用ぶりを示すものである。大学南校（のちの東京大学）時代、仏国法典をはじめとしてさまざまな重要翻訳書を出す一方で、科学教育においても卓越した指導力を示した。オランダ医学に代えて、明治2年のドイツ医学採用の国策化に際しても、彼は時の医学取締掛・相良知安に公平妥当な助言と支持を与えた²²⁾。彼を政府に招いたのは大隈であった。明治5年の学制が出されるときに大隈に建議して、学制と兵制の二つを布くことが日本近代化の大事な課題だと進言している。

さらにフルベッキはグリフィス、W. E. やジェーンズ、L. L. といった優れた人材の招聘を斡旋した。また、開成学校の教頭として日本国内各地の有能な宣教師を登用し、上京させて開成学校の教師とした。

フィラデルフィア生まれのグリフィス Griffis, William Elliot 1843.9.17-1928.2.5は、1869年ラトガース大学を卒業後、69-70年ブランズウィックのオランダ改革派教会神学校に学んだ宣教師で

ある。フルベッキ、G. H. F. からの依頼で、ラトガース大学の推薦を受け、越前の開明君主・松平春嶽の招きにより、70年福井藩の明新館に教師として来日した。71年から72年にかけて化学と物理学を教えたが、72年に大学南校へ転じ、東京開成学校で化学を専門の学問として初めて教え、在職2年半ののち74年に帰国した。

ニュージャージー州ミドルブッシュでオランダ改革派教会の執事・長老の子として生まれたワイコフ Wyckoff, Martin Nevius 1850.4.10-1911.1.27はラトガース大学で理化学を学び、1872年6月卒業後、文部省からグリフィス、W. E. の後任として招かれ来日し、福井の中学校教師に就任した。化学のほか主に英語を教え、同年7月から2年間、授業のほかに雨森信成らに聖書を講義、74年9月、新潟外国語学校教師に転任した。

徳川300年の伝統を担った者たちは、維新の動乱により江戸を離れて静岡に無縁移住していた。1871年に廃藩置県が断行され、静岡県が発足した。そこで旧幕臣たちが静岡で再起の手がかりとしたものに、クラークによる^{しずはな}賤機舎の洋学がある。米国ニューハンプシャーに生まれたクラーク Clark, Edward Waren 1849.1.27-1907.6.5は、アメリカ人教師招聘を勝海舟から依頼されたグリフェスと大学が同窓であったことから招かれ、22歳の若さで71年来日した。欧州旅行の帰途ジュネーヴに2年留学した経験をもつ人物である。契約書のなかに、キリスト教宣教を禁ずる一条があったが、岩倉具視のはからいで不問にされた。静岡学校では、午前中は倫理・地理・歴史・語学を、午後は物理・化学・数学を教え、日曜日には自宅に学生を招きバイブルクラスを開いた。宣教医マクドナルド、D. とともに行った宣教は、静岡バンドとして結実した。彼の人格は、かなり年長の儒者・中村正直にも感化を与えるほどであった。73年からは開成学校教師となり化学を教授し、同校でも理工科・法律科の学生のためにバイブルクラスを開いた²³⁾。

出身大学から教師招聘のほか、フルベッキは66年5月、佐賀藩家老村田政矩ほか2名に授洗し、肥後藩の横井小楠の甥・太平左平太兄弟、福井藩

の日下部太郎、岩倉具視の2子、勝海舟の長男小鹿らのラトガース大学留学に尽力している。この米国ニュージャージー州の大学は、明治初期の日本にとって不思議に縁のある存在であり、影響力が大きかった。73年には、ラトガース大学教授モルレーが来日し、日本の大学機構を視察、改良することとなる。

同様に、薩長におくれをとった熊本藩は、フルベッキを介してアメリカからジェーンズ大尉を招いて熊本洋学校を創設した。フルベッキの斡旋で71年7月来日したジェーンズ Janes, Leroy Lansing 1837.3.27-1909.3.27は、オハイオ州に生まれ、陸軍士官学校に1856年に入学、卒業と同時に南北戦争に従軍し、砲兵大尉となり予備役編入となった経歴の持ち主である。熊本藩の出した要求、すなわち軍人で学者かつ既婚者という条件にかなうものとして来日したのである。71年に開校された熊本洋学校で教頭の職に就き、実学的教育を施した。洋学校は、アメリカ遊学中病を得て帰国した横井小楠の甥・横井太平と左平太が、新知識導入の必要を藩主に建白、藩識者の学術振興策にかなうものとして採用され、実学党の賛同のもとに設立されに至ったものである。ジェーンズは赴任すると、彼以前に雇い入れられた教師をことごとく解雇し、最初の年は諸教科をひとりで担当した。その後しだいに学級が増加するとともに上級生から授業を補佐するものを選びだした。

イギリスの教育者トマス・アーノルドに私淑していたジェーンズは、洋学校においてラグビー校のように寄宿制を採用させ、教師と生徒が寝食を共にするなかで厳格な規律のもとで人格教育を徹底させようとした。小崎弘道の回想によれば、国家の隆盛を来す根本は富国強兵であり、国力増進の途は先ず産業の発達を計ることが肝要で、農業、鉱業、土木、造船、機械工芸を奨励すべきであること、政治は末業である、アメリカでは政治に携わる者は概ね劣等な人物で官吏は人間の職業中最も賤しい者であるとさえあるとさえジェーンズは教えたという²⁴⁾。中央政府の官職を求め立身出世を夢見る藩内子弟を支配した傾向とは異なる彼の立場は、実学党の思想と共通したものであった。

修業年限4年の洋学校で彼は、国語、数学、地理、歴史、化学、天文学等の一般科目を英語で教授すると共に、アメリカ本国から種物や農具を取り寄せ、石鹼製造のようなことも教えた。

アメリカ長老教会宣教師マッカーティ McCartee, Divie Bethune 1820.1.13-1900.7.17もフルベッキの推薦により来日した。彼はフィラデルフィアに生まれ、コロンビア大学入学後、転学しペンシルヴェニア大学を卒業、1844年医療宣教師として中国に渡り、医療活動のかたわら説教やトラクト配布などを行って伝道を推進、また米国外交官の要請により、通訳や米国代理領事を務めた人物である。72年上海に転任ののち宣教師を辞し、アメリカ領事館に奉職していたが、日本政府の招聘を受けた。72年9月から東京に移り開成学校の御雇教師として英語、医学、博物学、ラテン語などを教えた。

長老派宣教師コルネスは1868年に来日し、フルベッキの世話で70年から大学南校英語教師として雇用されたが、蒸気機関破裂により不慮の死をとげた²⁵⁾。彼の急死の後をうけて、その任期の残りを務め、大学南校で英語学および普通学教師として雇われたのが、同じく長老教会派遣の宣教師デイヴィッド・トムソン（タムソン）Thompson, David 1835.9.27-1915.10.29である。彼はオハイオ州カデズに生まれ、59年フランクリン大学、62年ウースター神学校を卒業後、63年5月に来日し横浜英学所で教えていたが、70年に東京へ移り大学南校で教えた。翌年、高知藩や彦根藩など各藩選抜の青年約30名を案内してアメリカとヨーロッパ諸国を視察している。なお長老教会のカロザースは72年6月から73年7月まで慶応義塾で教えている。

ヘボンらは伝道を目的として派遣された専門の宣教師であるが、維新当初におけるジェーンズ、クラーク、グリフィスといった諸藩・県や新政府の教育開拓事業に招聘された平信徒の人々も彼らに劣らぬ活躍をしたのである。この人びとは、学者であり、人格的魅力を備え、日本の開化にもてるものを惜しみなく注ぐ愛情をもち、求められれば政府にも進言し協力を惜しまなかった。とくにこの時期、大学南校や開成学校といった、やがて

1877年の東京大学の誕生につながる学校での活動は注目に値する。新政府は、徳川慶喜に従って静岡に移住していった旧昌平黉のすぐれた学者たちとともに、宣教師を含めた外国人を採用して、外国の学問を導入し、新しい教育の分野を担当させようとした。まもなく、新政府がフルベッキによる人材登用の限界を知り、アメリカから教育家モルレーを学監として採用して外国人教師の選考に当らせ、それにより高度の専門知識・学識を有する学者がお雇外国人教師として招聘されるまでの間、宣教師らは日本の最高学府のスタッフとして重用されたのである。

註

- 1) 藤第泰三：『キリスト教史』。日本 YMCA 同盟出版部、1979年、425頁。
- 2) 海老沢有道、大内三郎：『日本キリスト教史』。日本基督教団出版局、1970年、120-121頁。
- 3) 池田敏雄：『人物による日本カトリック教会史』。1968年、富田 仁：『メルメ・カシオンー幕末快僧伝』。1980年、西堀 昭：『日仏文化交流史の研究』。1981年。
- 4) 海老沢有道、大内三郎：『日本キリスト教史』。121頁。
- 5) O. Cary : A History of Christianity in Japan, 1909, Protestant Mission. ケリー：『日本キリスト教史』、プロテスタント編。
- 6) 隅谷三喜男：「新しい教えを信じた人たち」。小川圭治編：『日本人とキリスト教』(1973年、三省堂)所収、12-13頁。
- 7) 平塚益徳：「日本基督教主義教育文化史」。日独書院、1937年、『平塚益徳著作集 I 日本教育史』(教育開発研究所、1085年)所収、16頁、および18頁の注14。
- 8) Margaret Tate Kinnear Ballagh: Glimpses of Old Japan 1861-1866. 川久保とくお訳：『古き日本の瞥見』。有隣堂(有隣新書)、1992年、46頁、51頁。1861(文久元)年11月13日の神奈川発の手紙。
- 9) 小檜山ルイ：『アメリカ夫人宣教師—来日の背景とその影響』。東京大学出版会、1992年、117頁。
- 10) 丸山昌男：『開国』。1959年。『忠誠と反逆』(筑摩書房、1992年)所収、169-171頁。
- 11) 譯者研究については小澤三郎『幕末明治耶穌教史研究』(旧版1944年、新版1973年、日本基督教団出版局)所収の第13、14章の論文が詳しい。なお安藤はその後、1872年9月ヨーロッパにわたり、イギリスで勉強して74年に帰国し、76年から東京女子師範学校へ関信三の名で勤め英語を教えた。また同校付属幼稚園の初代監事となり、フレーベルの著書を『幼稚園法二十遊喜』として訳出したほか『幼稚園創立法』などの著作があり幼稚園教育の草分けとなった。
- 12) 小澤三郎：『日本プロテスタント史研究』。1964年。
- 13) 『松翁年譜』、牧田諦亮：『行戒と徹底』(講座近代仏教)
- 14) 『植村正久とその時代』第1巻。久山 康編：『日本キリスト教教育史・思潮編』。創文社、1993年、15頁より再引。
- 15) 『古き日本の瞥見』(前掲)はじめに
- 16) 同上 49頁。
- 17) 同上 50-51頁。
- 18) 浜田陽太郎、石川松太郎、寺崎昌男：『近代日本教育の記録 上』。日本放送出版協会、1978年、203-4頁。
- 19) 「横浜の英語学校」(小林功芳)、横浜プロテスタント史研究会編：『図説横浜キリスト教文化史』。有隣堂、1992年、122頁。
- 20) 同上 場所は現在、大蔵省管財局が管理する旧税務署のあたりといわれる。開設は65年2月と同4月との説もある。幕府高官の宿泊施設としても使用された。68年に廃止されたが、同年11月の旧修文館で再興された。翌年5月、北仲通り6丁目の武術稽古所跡へ、更に71年2月に近隣の仏語伝習所へ移った。71年8月には星亨が館長に就任(翌年6月辞任)、校名を啓行堂と改めた。
- 21) 「宣教師と医療活動」(大滝紀雄)、同上書、126頁。
- 22) V. E. Griffis: Verbeck of Japan, a Citizen of No Country. 1900, p. 234ff, p. 211f. 『東京帝国大学五十年史 上』。1932年、373頁。以下 藤沢利喜太郎：『日本の教育並に文明に及ぼしたる宣教師の功績』。『開教五十年記念講演集』。1909年、高谷道男編訳：『フルベッキ書簡集』。1978年、M. N. Wyckoff: Rev. Guid F. Verbeck, D. D. (The Japan Evangelist 2:5) 1895年、杉井六郎：「宣教師の明治維新—フルベッキの活動」(『世界史の中の明治維新』) 1973年、黒木五郎：『東山学院五十年史』。1933年、秋山繁雄：『明治人物拾遺物語』。1982年。
- 23) 太田愛人：『明治キリスト教の流域 静岡バンドと幕臣たち』。中央公論社(中公文庫)、1992年、29-32頁(「静岡バンドの人びと 二 化学教育の先駆者 静岡のクラーク」)。
- 24) 小崎弘道：『七十年の回顧』。1927年、278頁。平塚前掲書28頁より再引。
- 25) 久山康編『日本キリスト教教育史・思潮編』前掲、18頁